拝啓久しく御無沙汰仕り候大兄御近勤

奈何、小生は例の如く愚にもつかぬライラ様送り居り候、感懐なく、献性なく、哀憤あり、愚痴あり、蛍火たり、累火たり、遠ふして達せず、喪ふて得ず、たゞく巳ねる哉ナヤ

大兄よ人生とはいかなるものの様我に一夜語り先日書斎寧の世に曰く「史記頗愚にして才学足らず加ふるに蒲柳の質なり経世済民の人自ら別にあらん、我は唯だ徒に風月に楽しんで父母に後れんて

のみ」と、あの人仁には我は非ずや、あの人に憧れるには近からずや

アヽ大兄よあの人仁に近しあの人憧れたるなり然れども、アヽ大兄よ直情一径あの人遂はざれどもあの人の情は浅きなり、我等の情は漫散なり味暴なり乱に入れり、乱には入れど我等は情の深きなり、アヽ大兄よ熟れか是にして熟れか非なるべき

○悟と楽とは別ならずや大悟は大悲なり大兄閑に杖頭に銭掛けて奈良に遊び玉はゞ衣匠の

手になりし仏の慈悲顔を国に至へ似ず甚

手はなりし俳の苦悲額は固く玉へ必ず甚
相よ満斛の悲愁は花じへおるさまのあるべしや
心弱き者は禍なる我求めて得らるべき唯一の珠
宝の一悲字なるよ思ひ到れるもき、
大兄よ鎌倉山の端よりかゝる月も霧のうちよ沈み
希望の光よ霧むまる日も霧の中にあむむ、生
生る、
死何か涙おらむるべきたゝよル社は涙の壁
者おらむや

心乱れ長れは苦の去りえ方角迷ひおるは見し
許へ
寧ろきらひあり
私は欧外先生は尊べども牧は私、直盛宙外
拙月の後は訳れるものあり、上田敏氏の如きは千
思読するよ美しむ自余凡輩唯し面謾
する可おらん
先よ僕は昨夜上野よ出けり金上京むべきそ食男
よ一鉢の恵はおさんとして能はむりき聞き玉へ私も
彼も不幸おりしより、彼よして差し私よ暗き所
人げなき所にて精ひしおらば私は彼の手はとり

人げなき所にて精ひしぼらば秋は徳の手柄とり

怨ろ無ふべかりしまり あやまり 彼は光眩き電燈の下人通り騒きき所にありしかば秋は躍躍せり知り人も見られもやせん偽善者とや思はれんと、思ひしは秋なり、去れど兄は秋は俗に熟に思へり 今日の世は腦気おく善善なおしうるものは幸おりと、今日の世は秋等の如き卑怯者は為せいと欲する善善は善善すらゆるまず許せいまず、今日の世は悪善なおすは人は尚苦痛なおあるべからず

Art for Art's sake などゝ云ふ反鹿者の代表者は政社、敵の後より

酔作者気候の毋ニ就は硯友社なり

常識の外に貴ぶべきものなく知らざる擁板漢は

道徳審判の後より

大和魂！！に代 文界は之等の徒の勢力環内

ニあるなり

東洋毒報と中す雑誌独歩先生なりとして

東洋毎報と申す雑誌独歩先輩として
出でたり、市閲おくばか送り申すべきか
山比古岩に平として花し
毎報の祝宴会とよばれてしゃぱん杯飲みし
途中は有明まで出でし先輩の話なる僕
何だか僕も落涙よりしより
近来酒杯飯むも楽しからず、詩するみも人
おし

死か生か
昇天然として秋は命運の様性とおらん
李太白謡曰 天生秋才必有用、千金散尽却
復来
直遥謡曰 一生不醉浮世酒
韓偃曰 自笑計狂独詩多
誰憐夢好独相思

酒生契

友よ汝唯一の福音と信ずる
無景庵 三萬里
醉仙

中澤臨川書簡　小島文八宛

本間文庫
文庫 14
C109